

# 城西大学図書館における館種を超えた地域連携

若生政江(城西大学水田記念図書館)

## 1. はじめに

従来、大学図書館に求められる機能は、その構成員である学生への支援、教育・研究を行なう教職員への支援であった。ところが昨今では、第三の要望として、その地域における社会活動の支援、生涯学習の支援など、地域住民への開放が求められるようになった。

大学にとって、教育・研究成果の情報発信を行い、社会への説明責任を果たすことが重要であると同様に、図書館などの施設を開放し、その所蔵する専門分野の資料を公開することも社会貢献の一つである。地域に根ざした大学として、その地域から評価されるためには、図書館も新たなサービスを展開していくことが求められているといえる。

一方、近隣市町の公共図書館でも、公共財政圧縮の中で、図書館予算もその影響を少なからず受け、図書購入費へのしわ寄せを余儀なくされている。このような現状の中、大学図書館、公共図書館が館種を超えて連携し、相互の協力体制を磐石にすることで、図書館の存在意義を社会に問うことができるのではないだろうか。

こうした課題に関する一つの事例として、本稿では、平成 21 年度における、城西大学水田記念図書館と隣接する坂戸市・鶴ヶ島市・日高市・飯能市、毛呂山町・越生町の公共図書館 6 館との館種を超えた図書館連携の取組みを報告する。

## 2. 地域連携の経緯

平成 19 年 1 月 19 日、埼玉県図書館協会平成 18 年度図書館ネットワーク研修会に於いて、埼玉県内公共図書館と埼玉県内大学図書館間の相互協力要領について図書館ネットワーク専門委員会の試案が示された。これを受けて城西大学でも地域の公共図書館とのネットワークを構築していくことは、図書館活動を拡張し、利用サービスを拡充するものであると考えていたところ、5 月 24 日、鶴ヶ島市及び鶴ヶ島市立図書館から大学と市の協定締結の打診があった。大学と市の協定については大学に委ね、図書館どうしの協定について積極的に対応することとした。

その後、双方の図書館を訪問し検討を重ね、7 月 20 日に相互協力協定を締結するに至った。続いて、毛呂山町、坂戸市、日高市、越生町、飯能市をそれぞれ訪問し、相互協力協定の提携について意見交換をし、各館との相互協力体制の整備を進めた。現在では、6 市町との提携が成立している。

「相互協力に関する確認書」及び「相互協力に関する実施要領」の取り交わしは以下のとおりである。

1. 鶴ヶ島市立図書館 平成 19 年 7 月 20 日
2. 毛呂山町立図書館 平成 19 年 10 月 17 日
3. 坂戸市立図書館 平成 19 年 11 月 14 日
4. 日高市立図書館 平成 19 年 11 月 20 日
5. 越生町立図書館 平成 20 年 6 月 10 日
6. 飯能市立図書館 平成 20 年 10 月 1 日

なお、「相互協力に関する実施要領」では、

提携した公共図書館の利用者は、各館の利用者カードを提示することで、お互いの図書館の閲覧を自由にすることができる。貸出を希望する場合は、図書館間相互協力制度を利用することで対応することになっている。提携した地域の入館者数は、[表 1]のとおりである。

[表 1] 提携している地域の入館者数

地域	2007	2008	2009
坂戸市	14	97	121
鶴ヶ島市	12	42	99
日高市	18	47	60
飯能市	0	4	9
毛呂山町	7	55	89
越生町	0	7	3
計	51	252	381

### 3. ライブラリーカード会員制度

ここで問題となったのは、直接大学図書館の本を借りたいという地域住民の要望に応えることこそ相互協力ではないかとの指摘を、坂戸市立図書館から受けたことである。坂戸市の場合、本学の学生は、自由に資料を借りることができるのに、大学図書館が市民に本を貸さないのは相互協力と言えないのではないかという素朴な疑問を投げかけられたのである。これに対しては、設置母体が私立大学であることの理解を求め、さらに、会員制利用者制度の検討を開始、平成 20 年 4 月、「ライブラリーカード会員制度」を制定することで対応した。1 年間 1,000 円の年会費を払って入会した会員には、2 週間の期間で 5 冊まで貸し出すようにした。これまでに 96 名が会員登録をしている。

### 4. 平成 21 年度の取組み

#### (1) 館長・主務者会議

平成 21 年度、本学図書館長は、図書館の今後の具体的目標の一つに、地域相互協力図書館との連携活動を積極的に推進することを挙げた。<sup>1)</sup>

早速、7 月 16 日「第 1 回地域相互協力図書館 館長及び主務者の集い」を本学において開催した。公共図書館 6 館から 10 名の参加を得、本学から館長以下 3 名が出席した。その中でこの集いの開催趣旨を説明し、今後の活動に対して積極的な意見交換を行なった。本学からは、施設や講師など大学にある資料や人材を提供し、地域との協同活動につなげるため、以下 3 点を提案した。

- 1) 技術的な連携 例えばレファレンスなどの共同研修
- 2) 合同主催による公開講座
- 3) 図書館祭りなどの協同イベント

この提案は了承され、担当者ベースで打ち合わせを行い、具体的に取り組むこととなった。

その他、公共図書館からは、

- ① 洋書の相互貸借ができることが公共図書館にとってありがたい。
- ② 中国語など留学生用の資料まで公共図書館で購入することはできない。
- ③ レファレンスワークが共同でできると良い。
- ④ 大学図書館の敷居が高い。

など、いろいろな意見が出された。この「集い」によりお互いが各館の実情を理解し、相互の関係が深められたといえる。

#### (2) 図書館活用講座の共催

鶴ヶ島市立図書館では、市民のための「図書館活用講座」を開催しているが、その中の企画として「大学図書館を知ろう」ということで、

本学図書館と共催で大学図書館活用講座を 9 月 25 日に本学で開催した。

広報は鶴ヶ島市で行い、本学図書館員がコレクションや図書館の利用方法を説明し、実際に利用者端末を使用して OPAC やデータベースの検索実習を行なった。自宅から使える OPAC やデータベースなどを知ること、大学図書館の受け入れ体制を感じていただけたようである。

### (3) 公開講座の共催

11 月 1 日、提携する 6 市町との共催による公開講座を初めて開催した。これは、大学からは会場と講師を提供し、広報活動は各市町で行なった。掲示するポスター、各市町の広報誌への掲載文面等は同一のものとし、利用者への積極的な案内を行なうものとした。開催日は、本学の大学祭（高麗祭）初日とし、当日の案内や学内放送など、高麗祭実行委員の学生に協力を依頼し、当日参加も可能とした。なお、鶴ヶ島市などが開催する図書館祭りと日程が重なったことは、今後の日程設定についての課題である。

当日の参加者は 67 名であった。参加者の内訳は[表 2]に示す。

【開催日】平成 21 年 11 月 1 日（日）

【会場】城西大学水田記念図書館 9 階

【内容】

「中島歌子の生涯」

講師：元城西短期大学教授 青木一男

『おくのほそ道』の旅の成就

講師：城西大学水田記念図書館長 黄色瑞華

[表 2] 公開講座参加者内訳

地域	参加人数
坂戸市	20
鶴ヶ島市	3

日高市	8
飯能市	3
毛呂山町	9
越生町	0
その他	24
計	67



[当日の様子]

### (4) 共同レファレンス研修会

共同レファレンス研修会を 3 月 19 日に本学図書館を会場として開催した。年度末の繁忙期の開催となってしまったが、公共図書館 4 館（坂戸市、鶴ヶ島市、飯能市、毛呂山町）より 4 名、本学より 4 名の参加があった。レファレンス担当者ということで、どの館からも経験年数の多いベテラン職員の参加があった。本学からは、館長、副館長もオブザーバーとして参加した。

事前に各館の特色と主なレファレンスの事例を収集し、当日の研修材料とした。公共図書館は、郷土資料が充実していることや、飯能市のこども図書館などが特色として挙げられ、大学図書館は、学部構成にあった資料収集や、所蔵するコレクションが特色といえる。各館の特色を知ることが、今後のレファレンス・サービスにおける相互協力につながることを期待される。

レファレンスの事例では、以下のような報告があった。

① 新住民による市の歴史や地理・地形などに対する問い合わせが多い。

- ② 寄贈資料の著者略歴を知りたい。
- ③ 楽譜の問い合わせに対する対応は？
- ④ 植物の枯葉の香りの成分。
- ⑤ 唱歌の歌詞の意味と故事の関係。

公共図書館では、あらゆる分野にわたって様々な問い合わせがあることが伺える。

大学図書館からは、学生に対して答えを教えるのではなく、調べる方法、調べ方を教え、自学自習を支援するようにしていること、しかし、一般市民に公開するようになって、今までと違った質問が届くようになってきたことが報告された。

また、収集方針・選書眼を養うことの重要性、大学図書館で進められている機関リポジトリなどにも話が及んだ。埼玉県大学・短期大学図書館協議会（SALA）の第 21 回研修会の研修テーマが、「あらためて大学図書館のレファレンスを考える」であったこと、その時の資料を埼玉県地域共同リポジトリ SUCRA に収録し、だれでも読むことができるのでレファレンス・サービスに役立ててほしい旨、紹介した。

2)

本学館長からは、

- ① 地域のことを知ることが地域にとって一番大事で、そこから郷土愛、地域愛が生まれる。
- ② 研究者は、公共図書館に対して、地域の郷土資料、民俗資料を期待している。
- ③ 公共図書館での研究者の質問に対しては、調査して答えを回答するのではなく、次へ進むための紹介までで良い。
- ④ 資料にたどり着くまでがレファレンス・サービスである。
- ⑤ 個人情報に関するような問い合わせには、注意が必要である。

など、研究者としての立場からアドバイスがあ

った。また、選書についても

- ① 寄贈資料の受け入れには、受け入れ基準が必要。断るときの基準が必要である。
- ② 客観的資料であるかどうか、図書館としての線引きをどうするか、第三者機関などの設置も必要ではないか。

とのコメントがあった。

少人数の研修ではあったが、有意義な研修会であった。今後は電子メールなどにより共同レファレンスの実践、参加館レファレンスのバックアップ体制についても検討していきたい。

## (5) その他の取組み

今年度は、図書館祭りなど共同イベントは開催できなかった。それでも毛呂山町立図書館のリサイクル祭りに本学の非受入資料、個人研究費図書返却時の私物資料や寄贈で送られた重複資料などの提供を行った。

## 5. 今後の課題

平成 21 年度は、どちらかというと大学図書館からの企画が多く、行事日程の調整が難しく参加できない館もあった。また、人員が少なく参加できない館もあった。連携図書館との十分な協議による協力体制を作ることが今後の課題である。図書館の講座やイベントなど、共同開催や共同広報によるメリットは大きい。例えば、公開講座の共催であれば、人的にも経費的にも 1 館あたりの負担が少なくてすむ。人員が少ないからこそ、享受できるメリットも大きいはずである。連携館が協力することで図書館からのアピール、図書館の存在意義を社会に伝えていくことが可能ではないか。

平成 21 年度の館種を超えた図書館連携の取組みについて報告させていただいた。平成 22

年度は、更に協議を重ねて取り組むことになるであろう。共同開催による公開講座、図書館活用講座などはもちろんのこと、実務レベルでの共同研修、人材育成は、共同だからできる大きな効果といえる。館種を超えた図書館ネットワークにより、積極的な実りある連携活動を進めることで、利用者支援につなげたい。

<注・参考文献>

- 1) 城西大学水田記念図書館長メッセージ.  
「変化する大学図書館」(館長 黄色 瑞華)  
<http://libopac.iosai.ac.jp/guide/message/message.html>, (参照 2010-03-19)
- 2) 平成 21 年度 SALA 研修会資料.  
[http://sucra.saitama-u.ac.jp/modules/xoonips/listitem.php?index\\_id=3912](http://sucra.saitama-u.ac.jp/modules/xoonips/listitem.php?index_id=3912), ( 参 照  
2010-03-19)